

社会福祉士課程を導入すること

人間心理学科の立場から

浮ヶ谷 幸 代

社会福祉士課程の導入は、ここ数年人間心理学科で卒業生が福祉業界に就職していることに端を発している。これまでの福祉系団体・企業への就職者数をみても、3年間で40名（社会マネジメント学科を含めると53名）にものぼっている。福祉系の資格なしで福祉業界に飛び込んでいく学生のために何かできないか、という声があがった。そこで、人間心理学科という学科を生かして福祉に関する科目を設置するために、2011年度から「福祉心理学」の専任人事を要望していった。2013年度によりやく人事が承認され、紆余曲折のあと、社会マネジメントとの協働で人間社会学部内に社会福祉士の国家資格を取得する課程を設置することになったのである。

それぞれの学科をまたいで課程を置いたのはそれなりの意味がある。ここでは人間心理学科と課程との関係について述べておきたい。これからの社会福祉は、社会福祉制度の内容や機能に関する知見だけでは収まりきれない広がりをもっている。かつて社会福祉は「一部の困っている人たち」のために何ができるかというwelfare（福祉）に着目してきたが、現在では「すべての人たち」にとってのwell-being（安寧、良き生）とは何かという視点に移行しつつある。一方、人間心理学科では、これまで現代心理学の科学的なアプローチと実践的な臨床の知から心にアプローチしてきた。それだけでなく、人類学や哲学・倫理学などの学際的なアプローチを取り入れながら、文化・社会というより広い視座から心について学ぶことを掲げ、他大学にはないカリキュラム編成を行ってきた。こうした人間心理学科独自のカリキュラムの中に課程を設置することで、well-beingを希求する今日の社会福祉の学びに大いなる厚みを与えてくれるはずである。

では、人間心理学科に社会福祉士課程を置くことで学科内にどのような影響がある

だろうか。ここでは学生への影響と教員への影響についてふれておきたい。両学科にとって初めての国家資格課程である。国家資格試験にチャレンジするということはそれなりの自学習が必要となる。そのことが課程以外の学生に良い刺激を与え、学びへの意欲をかき立てられる学生が増えることが期待されている。福祉系施設・機関でのおよそ一ヶ月にわたる実習は、社会への貢献と仕事への責任をより意識化する良い機会となる。課程以外の学生にとっても普段の学びが社会にいかに関わりつくかを垣間見る機会となるだろう。

教員への影響であるが、課程が実際に軌道に乗るためには学科全体による支えが不可欠である。設置の準備過程で、コードシェア科目が増えることによるカリキュラム編成の煩雑化や実習先施設・機関での巡回指導など、学科教員にとって初めて経験する課題が明らかになっている。これらの課題を社会福祉の担当教員だけの問題とするならば、課程そのものが立ち行かない。学科すべての教員の協力と応援があつての課程である。課程が抱える課題には、学科全体で取り組む覚悟が必要である。

試行錯誤しながら立ち上げた社会福祉士課程である。設置の向こうに希望の光が見えることを心から願っている。